

文芸批評家サルトルとその時代

サルトル，ブラジヤック，モーリアック

重見晋也

はじめに

戦後のフランス知識人界でサルトルがいかにして覇権を確立したかについて、社会的な見地から詳細な分析を施したボスケッティは、その著書の中で、作家にとって批評活動は自らの特異性を主張し証明づけるために必要不可欠であると述べている¹⁾。サルトルの場合個別の文学作品を対象として雑誌などを中心に批評活動を行っていた時期はそれほど長くなく、*Situations, I* に収録されている十六作品だけである。そしてその活動は1938年に始まり1944年のパリ解放以前の間集中している。

このように非常に限られた期間に文芸批評家としての名声を確固たるものとする一連の作品を発表したのだが、文芸批評家としてのサルトルの活動を理解するには、同時代の批評の状況を理解することが不可欠である。そこで本論では、サルトルと同時代に活躍した作家であるロベール・ブラジヤックを取り上げ、二人の作家が執筆したモーリアック論を比較することで、サルトルのモーリアック論での問題意識をブラジヤックのそれと比較し、文芸批評家としてのサルトルを同時代の作家・批評家たちの中に位置づける端緒としたい。

1. サルトルのモーリアック論

サルトルは「M. François Mauriac et la liberté」²⁾の中で、モーリアックの *La Fin de la nuit* を取り上げて小説技法という点から批判を繰り広げていた。サルトルのモーリアック批判には三つのポイントがあった。第一に、モーリアックの使う三人称の曖昧さをめぐる指摘。第二に、モーリアックが作中人物に与える宿命についての指摘。そして第三に話法の演劇性についての指摘である。また最初の二点については、論の展開の中で登場人物の意識や自由という問題に昇華されている。この章では先ずサルトルの論を再確認していくことにする。

モーリアックの *La Fin de la nuit* は三人称によって語られる小説であった。サルトルはこの三人称という人称について次のように述べている。

C'est que M. Mauriac utilise, [...] l'ambiguïté romanesque de la « troisième personne ». Dans un roman le pronom « elle » peut désigner *autrui*, c'est-à-dire un objet opaque, quelqu'un dont nous ne voyons jamais que l'extérieure. [...] Mais il arrive aussi que ce pronom nous entraîne dans une intimité qui devrait logiquement s'exprimer à la première personne : « Elle entendait avec stupeur résonner ses propres paroles. » Cela, en effet, je ne puis le savoir que si c'est *moi* qui suis *elle*, [...]. En fait les romanciers utilisent ce mode d'expression tout conventionnel par une sorte de discrétion, pour ne pas demander au lecteur une complicité sans recours, pour recouvrir d'un glacis l'intimité vertigineuse du « Je ». [...] Le même mot a donc deux fonctions opposées : « elle-sujet » ou « elle-objet ».

(pp.38-39.)

三人称を用いた語りの場合、語り手は本来登場人物をその外部からのみ描くことしかできないと主張した上で、モーリアックの小説においては、三人称で人物を描きながらもあたかも一人称による語りであるかのように、登場人物の内面の心理をも読者に垣間見させている場合がある、とサルトルは指摘している。そして、一人称的な意味合いも持つことができるという三人称の曖昧さを、作者が巧妙に利用することによって、作者と読者の間に築かれるべき共犯関係という幻想を作り上げている、とも指摘している。サルトルはモーリアックが用いる三人称による語り的手法をこのように分析しているのである。

ところで、サルトルがモーリアックを批判しながら主張する語りとは、語り手が作中人物と一体となって語りを行うか、あるいは作中人物を客体化して描くか、という非常に厳密なものである。

Il [=Mauriac] a écrit un jour que le romancier était pour ses créatures comme Dieu pour les siennes, et toutes les bizarreries de sa technique s'expliquent par ce qu'il prend le point de vue de Dieu sur ses personnages : Dieu voit le dedans et le dehors, le fond des âmes et les corps, tout l'univers à la fois.

(pp.41-42)

サルトルによれば、作中人物の「証人となるか共犯者となるか」を選んで語らなければならなかったところを、作中人物をその内側からも外側からも描き出したがために、モーリアックは「作中人物の意識を抹殺している」とまでいわれているのである。しかもこれはただ *La Fin de la nuit* での主人公テレーズに対してのみ指摘されているだけではない。サルトルは、同様の手法をモーリアックがテレーズ以外の

作中人物にも適用して物語を構築していることを指摘している。こうした遍在的な視点をサルトルは「絶対的真理あるいは神の視点」«la vérité absolue, ou point de vue de Dieu» (p.43) と呼び、こうした視点の導入は小説というジャンルを不可能にしていると述べている。これがモーリアックに対するサルトルの第一の批判であり、語りの視点を問題にしているのである。

こうした語りの視点についての分析を前提に、サルトルは続けて、モーリアックの作中人物の描き方も批判している。サルトルによれば、語りの視点を定めないよりもっと大きな過ちをモーリアックは小説家として犯しているのである。それは小説の作者として作中人物たちを宿命づけていることである。

Mais il y a plus grave : les appréciations définitives que M. Mauriac est toujours prêt à glisser dans le récit prouvent qu'il ne conçoit pas ses personnages comme il le doit. Avant d'écrire il forge leur essence, il décrète qu'ils *seront* ceci ou cela. (p.43)

サルトルが *La Fin de la nuit* の中に読むテレーズは、あたかも「モノ」«chose» (p.44) であるかのように読者に提示されていて、彼女の「意識、自由がやってくる」«La conscience, la liberté viennent» (p.45) のはモノとして描き出された後である。サルトルにとって意識とは自らを成すものであり、決してモノのようにそこにあるというものではない。「Seuls les choses sont : elles n'ont que des dehors. Les consciences ne sont pas : elles se font.» (p.44) サルトルにとってのモノとは、単にそこにあるだけで時間やそれを見る意識に対して逆らうような存在ではなく、反対に明快な存在であった。そしてサルトルの目に映ったモーリアックの作中人物たちも、そうしたモノとしての特徴を備えていたのである。第一の指摘とも関連するが、サルトルの考えるところでは、作中人物とは単なる小説家の被創造物ではない。作中人物は作中人物なりの法則と意識とを持っているのであり、小説家はそのような作中人物を描く場合に「外部か内部か」彼らを描き出す視点を決めなければならなかったのである³⁾。そうであるにもかかわらず、あたかもモノを描くかのように、語りの視点を定めることなくテレーズを描くモーリアックの小説家としての態度は、まさに作中人物を意のままに創出する神として自らを物語世界に位置づけることになるものである、とサルトルは批判しているのである。

以上二つの指摘は、*La Fin de la nuit* におけるモーリアックの語りの手法に対するものであった。そして両方の指摘に共通しているのは、語り手モーリアックの視点が神の視点のように作中人物に対して遍在しているということである。サルトルは

小説の語りには用いられるべき正当な手法があり、作中人物の描写に際しては正しい手法を用いなければならないという前提に立ち、モーリアックの語り的手法が正しい手法ではないことを批判しているのである。

第三の指摘は、話法の演劇性についての指摘である。話法も語り的手法の一つと考えることができるが、これまでの指摘とは異なりサルトルはそこで小説を構成すべき正当な話法の存在を主張しているわけではない。

Ce n'est pas tout : M. Mauriac exige que chacun de ces entretiens soit efficace et, par là, se soumet encore à une loi de théâtre, car c'est au théâtre seulement que le dialogue doit faire avancer l'action à tout prix. (p.50)

このように作中人物たちが互いに交わす会話が演劇的であることをサルトルは指摘している。サルトルにとって小説の作中人物の発話は、雄弁さとは無縁で常に読者にそのことばの奥を読み解こうとさせるものでなくてはならない⁴⁾。しかしサルトルは、ルネ・モンドゥと口喧嘩をする際のテレーズのことばを例に挙げて、モーリアックの作中人物たちの発話が読むためというよりは朗誦されるために書かれていることを指摘している⁵⁾。

モーリアックが全く恣意的に語りを行うことによって、小説の作中人物が持つべき彼らなりの意識を剥奪してしまっている、というのが作中人物を描写する語り的手法という観点からのサルトルの指摘であった。第三の指摘ではそれだけにとどまらず、モーリアックの小説は、作中人物たちが交わす会話のことばという点においてもはや小説と呼ぶことすらできない⁶⁾、サルトルは *La Fin de la nuit* とその作者モーリアックをそのように断罪しているのである。

以上のようにサルトルのモーリアック論では、モーリアックが用いる語り的手法によって作中人物の自由が奪われていると指摘されている。しかし「意識」と「自由」とを同格に扱う論拠に関しては言及されてはいない。またサルトルはモーリアックの小説手法を批判していることは確かであるが、かといってそうした批判から出発して自らの小説論を大々的に展開しているわけでもない。唯一作中人物たちの発話に関する考察のみが、サルトルの小説観を垣間見させてくれるだけである。とはいえ、サルトルのこのモーリアック論は発表された当時非常に大きな反響を呼んだこともまた事実である。

II. サルトルのモーリアック論の発表時期とロベール・ブラジヤック

«M. François Mauriac et la liberté»は*La Nouvelle Revue Française*誌（以下“N.R.F.誌”と略す）の1939年2月号に発表された批評作品である。生涯にわたって執筆した作品は膨大であるが、このモーリアック論が発表された時点での作品数はそれほど多いわけではない。小説だけに限ると、文壇へのデビュー作となった*La Nausée*が1938年にガリマール社から、それに続いて1939年1月に同じくガリマール社から短編集*Le Mur*が出版されていた（この短編集でサルトルがロマン・ポピュリスト賞を受賞するのは1940年4月である）。つまり、長編小説を一編と短編を五編を書いていたにすぎず、小説家としてはまだまだ新人だったといえる。また文芸批評家としても駆け出しで、ニザン論、ドス・パソス論、フォークナー論を各一編ずつ書いているにすぎない⁷⁾。一方でサルトルの批判の矛先を向けられたフランソワ・モーリヤックは、1933年には既にアカデミー・フランセーズに入ったことからも分かるように、文学界の重鎮であったし、その人気もまだ衰えてはいなかった⁸⁾。つまりサルトルのモーリアック論は新人の作家が大御所に向かって小説家ではないと言いつつしたのである。そのため、N.R.F.誌にサルトルのモーリアック論が発表されるや否や、N.R.F.誌とその他の文芸雑誌の論者との間で、このモーリアック論を巡って様々な論争が巻き起こった⁹⁾。1939年1月に短編集*Le Mur*が出版された際にも、*L'Action française*紙の中でロベール・ブラジヤックがこの短編集を取り上げ、サルトルのモーリアック論に言及しているほどである¹⁰⁾。

ところで、1938年から1939年というパリ占領前夜においてもN.R.F.誌が文芸雑誌として影響力を保ち続けていたが、それに対抗するような文芸雑誌あるいは定期刊行物が存在し、一定の評価を得ていたこともまた事実である。その一つが、先ほど名前を挙げたロベール・ブラジヤックが«Causerie littéraire»という文芸欄を担当していた日刊紙*L'Action française*であった。

右翼政党であるアクシオン・フランセーズは1926年の教皇ピウスXI世による批判や1936年2月のブルム内閣による解散命令にもかかわらず活動を続け、日刊の機関紙*L'Action française*を発行し続けていた。*L'Action française*紙は当時発行部数を次第に減少させており、他の新聞と肩を並べる程の購買者を確保しているわけではなかったが¹¹⁾、それでもヴァレリーが定期購読するなど文芸欄の質は評価されていた。そうした*L'Action française*紙の文芸欄を1931年から責任担当していたのがロベール・ブラジヤックである。

ブラジヤックはサルトルよりも四歳若く、1909年ベルピニャンに生まれ、ルイ大王校から高等師範学校に入学している。学生時代から政党活動を続けており、シャ

ルル・モーラスに心酔していた。作家としてのデビューは非常に早く、*L'Action française* 紙の文芸欄を、病床に伏した前任者ジャック・ド・モンブリアルから引き継いで仮に担当するようになったのも1931年6月、ブラジヤックが22歳の時であった。ブラジヤックはその文芸欄を前任者が他界した1932年5月から正式に担当することとなり、無題だった文芸欄を「Causerie littéraire」と命名し、紙面も一新したのであった。1931年6月の担当開始以来、1939年9月に再度兵役に就くまでの8年間、途中兵役により連載を中断していた短い期間を除いて、ブラジヤックはこの文芸批評欄を担当し続け、古典から現代までの様々な文学（主に小説）作品について批評を行っている。

それでは、サルトルのモーリアック論が発表された1939年2月当時、ブラジヤックの執筆活動はどのようなものだったのだろうか。ブラジヤックの場合、既に小説四編と評論五編を出版している¹²⁾。評論のうち一編は *L'Action française* 紙等に掲載した評論を集め *Portraits* と題して出版されたものである。雑誌や新聞への寄稿についていえば、1939年の時点でブラジヤックが文芸批評を掲載していたのは「Causerie littéraire」だけで他には寄稿していない。1931年に *L'Action française* 紙へ寄稿を開始した当初は *La Revue française* 誌に演劇批評を寄稿していた。しかし、同誌が1932年6月に週刊誌から月刊誌に変わるなどしたこともあり、その寄稿数は *L'Action française* 紙への寄稿数ほど多くはない¹³⁾。

1939年までにブラジヤックは五百編を越える批評を発表しているが、モーリアックとの関連でいえば、その批評家活動の間にブラジヤックがモーリアックの作品を取り上げたのは、全て *L'Action française* 紙への寄稿で合計六回である。一番最初のモーリアック論は、仮担当の開始から数えて二回目の1931年7月16日付けの *L'Action française* 紙上の評論で、アルフォンス・ドーデの *La Doulou* と共に *Souffrances et bonheur du chrétien* を取り上げている。次にブラジヤックによるモーリアック論の一覧を挙げておく。

- 16 juillet 1931 : «Alphonse Daudet : "La Doulou", François Mauriac : "Souffrances et bonheur du chrétien"»¹⁴⁾
- 24 mars 1932 : «François Mauriac : "le Nœud de vipères"»¹⁵⁾
- 7 février 1935 : «François Mauriac : "la Fin de la nuit"»¹⁶⁾
- 30 janvier 1936 : «François Mauriac : "Les Anges noirs"»¹⁷⁾
- 16 avril 1936 : «François Mauriac : "Vie de Jésus"»¹⁸⁾
- 26 janvier 1939 : «François Mauriac : "les Chemins de la mer"»¹⁹⁾

1931年の論考を除けば、ブラジャックのモーリアック論は全てが書評と位置づけることが可能で、実際モーリアックが新たに作品を出版する度にその作品を取り上げている。*Le Nœud de vipères*は1932年3月に出版され、*La Fin de la nuit*は1934年12月に*La Revue des Deux Mondes*誌に発表された。*Les Anges noirs*は1935年6月から9月にかけて*Gringoire*紙に*L'Ange noir*というタイトルで連載されていた。さらに1935年に執筆されていた*La Vie de Jésus*は1936年2月に出版され、*Les Chemins de la mer*も*Candide*紙に1938年4月から7月にかけて連載されていた。ところでこのように一覧にすると、1931年のモーリアックについての批評とその他五編は、題名の形式が異なっていることに気づく。最初の批評ではアルフォンス・ドーデとフランソワ・モーリアック二人の作品を取り上げているが、他の五編では題名にモーリアックの名前と作品名しか見ることができない。「Causerie littéraire」の基本的な構成は、複数（ほとんどの場合二つ）の作品を取り上げて論じるという形式であった。その点からすると、モーリアックが一人だけで扱われているのは記事の構成という点からは例外的であるといえる。このようにブラジャックはサルトルのモーリアック論に先駆けてモーリアックについての批評を発表していたのである。しかも、彼のモーリアックに対する関心の高さは、モーリアック論の本数やその扱い方から見ても明らかだといえよう。それではブラジャックはサルトルのモーリアック論をどのように見ていたのだろうか。

III. ブラジャックのモーリアック論

ブラジャックによる六編のモーリアック論はその時期も取り上げている作品も違っているが、一つの点において共通している。それは、モーリアックを批判するブラジャックのことばが皮肉に満ちあふれていることである。1931年の最初のモーリアック論はモーリアックの作品とドーデの作品を対比しドーデを賞賛するという内容であった。そこから、ドーデとの比較の対象としてモーリアックが利用されたのであり、皮肉な表現はそうした比較対照の結果だと考えることもできる²⁰⁾。しかしたとえば1939年1月26日付の*Les Chemins de la mer*を取り上げた論では、冒頭から皮肉に満ちた表現という特徴を認めることができるのである²¹⁾。そこにおいてブラジャックは、読者はモーリアックが小説家であることを忘れかけていた、と批評の冒頭から皮肉に満ちたことばを用いて論を進めている。

ブラジャックのこうした不躰さは、何もモーリアック論に限ったことではない。彼がある作家を「Causerie littéraire」で取り上げる度に、ブラジャックおよびアクション・フランセーズと政治的思想を分かち合う作家でない限り、その作家はブラジャ

ックの批判の対象になっていることが多いのである²²⁾。このようにブラジヤックの文章はしばしば挑発的ではあるのだが、その指摘には興味深い分析も含まれている。

C'est un roman court (je veux dire qu'il n'a pas trois cents pages, imprimées en gros caractères), et il a tous les caractères du roman long. Faute d'un développement suffisant, les allusions au passé demeurent sans grand pouvoir, et les épisodes auxquels nous assistons semblent brefs, d'une ligne maigre, à peine esquissés. Leur accumulation donne au livre un aspect essoufflé. (AFcl-1936-01-30, p.638)

ブラジヤックはモーリアックの小説技法が短編小説においてその真価を発揮してきたと考えている²³⁾。その前提からブラジヤックが指摘しているのは、モーリアックの *Les Anges noirs* が比較的短編の小説であるにもかかわらず、エピソードを重ねて物語を構成するような長編小説の技法によって書かれており、そのために小説が全体として非常に淡泊なものに終わっている、ということである。ブラジヤックはこのようにモーリアックの小説技法の特徴を分析している。残念ながらブラジヤック自身が考える長編小説と短編小説の技法上の違いについて、これ以上の踏み込んだ考察はこのモーリアック論では展開されていない。しかしそうであってなお興味深い指摘であるということができよう。

ところで、サルトルが「M. François Mauriac et la liberté」を *N.R.F.* 誌に発表したのは、既に述べたように、1939年の2月号の中においてであった。そしてブラジヤックが最後のモーリアック論を「Causerie littéraire」に掲載したのは1939年1月26日である²⁴⁾。1939年の1月はサルトルが短編集 *Le Mur* を出版した時であり、短編集が発表されるとブラジヤックはサルトルの *Le Mur* を「Causerie littéraire」で取り上げたのだった。このように考えると *Les Chemins de la mer* についてのブラジヤックの批評は、サルトルのモーリアック論を念頭に置いて書かれたと考えることに蓋然性がある。

事実、モーリアックのように「神の視点」を採るのではなく、小説家は語りにおいて作中人物の共犯者となるか証人となるかを選ばねばならない、と主張したサルトルに呼応するかのよう、ブラジヤックは彼の最後のモーリアック論の中で次のように述べている。

Deux scènes, en somme, suffisent à le [=Landin] dessiner. Et je ne trouve pas que l'on aurait raison de reprocher à M. Mauriac la transformation de son personnage. Car c'est un personnage vu du dehors. Son mystère reste entier, comme le mystère du «monsieur qui

passee».

(AFcl-1939-01-26, p.252)

このように「それは外部から見られた作中人物である」とイタリック体で強調して述べ、ランダンという作中人物の心の内部は語り手によって恣意的に明かされることなく、読者にとって未知なるものであり続けている、という指摘にはサルトルのモーリアック論の影響を認めざるを得ないだろう。何故ならば、ブラジヤックはこの前後で作中人物を描く語り手の視点についての指摘を行っているわけではないため、この指摘は非常に唐突なものになっているからである。またブラジヤックは、*Le Mur* の評論においてサルトルのモーリアック論にふれ、次のように述べている。

Il [=Sartre] a écrit tout récemment un article critique sur M. François Mauriac, dont les connaisseurs ont pu apprécier l'agréable méchanceté et l'intelligence féroce.(AFcl-1939-04-13, p.280)

«l'agréable méchanceté»や«l'intelligence féroce»といったことばを読むと、サルトルのモーリアック論に関して、客観的にはサルトルの批判は言い過ぎであるが指摘した内容は正しい、とブラジヤックが考えているといえる。何故なら、サルトルの論は「意地悪」であってもブラジヤックのような「専門家」の眼には「心地よい」し、そこに「知性」を感じることもできる、と述べているからである。既に見たように、ブラジヤック自身も小説家モーリアックの才能に不満を持っていたのであるから、サルトルのモーリアック批判を好意的に見ていたと考えることは十分にできる。こうした二人の作家の交感は一にモーリアックを対象とした論考に認められるだけではなく、サルトルがモーリアック論で展開していた語り手の視点と作中人物の問題をめぐる考察についても当てはまる。ブラジヤックは1932年に発表された *Le Nœud de vipères* についての論考の中で、主人公である退役弁護士ルイに関して次のように述べている。

M. Mauriac a admirablement montré tout ce qu'est le héros au-delà de ce qu'il sait de lui-même. Et peut-être pouvons-nous le comprendre et l'expliquer d'une façon autre que l'auteur, puisque c'est un être vivant, avec ses lucidités et ses aveuglements, qui est devant nous.
(AFcl-1932-03-24, p.239)

ブラジヤックはこのように、作中人物が自らについて知り得る以上のことについ

て語り手自らが説明していることを指摘している。こうした指摘は、サルトルが語り手に作中人物の言動の証人として存在するか作中人物の内面に密着して存在するかを決めるよう求めた、モーリアック論でのあの「内部か外部か」という二者選択と同じ指摘だと考えることができる。さらにブラジヤックが小説の作中人物を«un être vivant»ととらえ、作中人物に彼ら独自の意識を認めている点も、サルトルが作中人物に意識と自由を求める点と呼応していると考えられるのである。

ブラジヤックのこのモーリアック論は1932年に発表されており、サルトルのモーリアック論よりも前に発表されていることになる。そしてブラジヤックはその中で既に、サルトルと同じくモーリアックを対象として、小説における作中人物と語り手の視点の問題を提起していたのである。

結論

サルトルのモーリアック論は、モーリアックが語りにおいて用いていた「神の視点」を批判し、小説の語り視点の本来のあり方を示したものであった。こうしたサルトルの主張は、「『正確な法則』への準拠というのが効いて、彼 [=サルトル] のエッセーのなかで次々に下される評決は権威あるものとして鳴り響き、駆け出しが著名作家を批判するその厚かましさが、根拠あるものと映った」²⁹と指摘されてもいる。しかし本論においてサルトルと同時代に活躍したロベール・ブラジヤックを取り上げ彼のモーリアック論をサルトルの論と比べることによって、サルトルのモーリアック論の問題意識が、当時としては必ずしも突出したものではないということが確認できた。

サルトルとブラジヤックは政治思想こそ違い、両者とも同じ世代に属し、同じように高等師範学校を卒業したという点で、作家としての形成過程における共通した経験を認めることもできる。サルトルのプレイアッド版小説全集の序文でジュヌヴィエーヴ・イットは、作家サルトルの形成過程において高等教育が果たした役割が大きいと指摘しているが³⁰、ブラジヤックとの比較を通してみると、そうした指摘がサルトルに対してのみ有効なのではなく、サルトルと同世代の作家たちにも有効なのではないかという疑問が出てくる。この点は今後考察すべき重要な課題であるといえるだろう。

注

- 1) Cf. Anna BOSCHETTI, *Sartre et « Les Temps Modernes »*, coll. «le sens commun», les Editions de minuit, 1985, pp.62-67 (アンナ・ボスケッティ, 石崎晴己訳, 『知識人の覇権』, 新評論, 1987年, p.89.)
- 2) Jean-Paul SARTRE, «M. François Mauriac et la liberté», *Situations, I*, Gallimard, 1947, pp.33-52. 以下FMLと略す。また第一章で本文及び引用文中に示した頁番号はFMLの頁を示す。なお本文中の日本語は小林正訳を参照した。(ジャン＝ポール・サルトル, 小林正訳, 「フランソワ・モーリヤック氏と自由」, 『シチュアションI』, 『サルトル全集』第十一巻, 人文書院, 1965年, pp.30-49.)
- 3) «[...] : les êtres romanesques ont leurs lois, dont voici la plus rigoureuse : le romancier peut être leur témoin ou leur complice, mais jamais les deux à la fois. Dehors ou dedans. Faute d'avoir pris garde à ces lois, M. Mauriac assassine la conscience des personnages.» (FML, p.44.)
- 4) «Il fait sombre, le héros lutte pour s'exprimer, ses paroles ne sont point des tableaux de son âme, mais des actes libres et maladroits, qui disent trop et trop peu; le lecteur s'impatiente, il cherche à voir clair par-delà ces déclarations touffues et bégayées. Cette résistance des mots, source de mille malentendus et de révélations involontaires, Dostoïevski, Conrad, Faulkner ont su l'utiliser pour faire du dialogue le moment romanesque où la durée a le plus d'épaisseur.» (FML, p.50.)
- 5) «"Aussi extravagant que soit votre ami, il ne saurait l'être au point de vous croire capable de plaire... Si j'avais eu le dessein de le rendre jaloux, j'aurais montré un plus grand souci de vraisemblance..."» (citée par Sartre, FML, p.49; François MAURIAC, *La Fin de la nuit*, dans *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, tome III, coll.«Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1981, p.171.)
- 6) «[...] *La Fin de la nuit* n'est pas un roman — tout au plus une somme de signes et d'intentions. M. Mauriac n'est pas un romancier.» (FML, p.52.)
- 7) «Sartoris par William Faulkner», dans *La Nouvelle Revue Française*, n° 293, février 1938, pp.323-328; «A propos de John Dos Passos et de 1919», dans *La Nouvelle Revue Française*, n° 299, août 1938, pp.292-301; «La Conspiration par Paul Nizan», dans *La Nouvelle Revue Française*, n° 302, novembre 1938, pp.843-845. 列挙すると分かるように, サルトルの文学批評作品はモーリアック論も含めて *N.R.F.*誌に発表されている。
- 8) 占領下のパリでのことであるが, *La Pharisienne* (1941)の出版に際して, ドイツ軍は五千部の出版しか認めなかったが, 出版元のグラッセはもっと売れると確信し

ていたため初版発行部数に不満だったらしい。このことから依然として多くの読者がいたと考えることができる。Cf. Pierre HEBEY, *La Nouvelle Revue Française des années sombres 1940-1941*, Gallimard, 1992, p.201-202.

9) 特に *la Revue universelle* 誌 1939 年 2 月 15 日号でのアンドレ・ルソーによる「A propos du François Mauriac de Sartre」がある (cf. Michel CONTAT et Michel RYBALKA, *les Ecrits de Sartre*, Gallimard, 1970, p.72)。

10) サルトルのモーリアック論に対するブラジャックの反応については、本論第三章で後述するが、ブラジャックはサルトルの論に対して必ずしも否定的であったわけではない。Cf. Robert BRASILLACH, «Jean-Paul Sartre : "le Mur" Collection Présence : "le Mystère animal"», dans la «Causerie littéraire» de *L'Action française*, 13 avril 1939, repris dans ses *Œuvres complètes*, tome XII, le Club de l'Honnête Homme, 1964, pp.280-282. 以下 AFcl-1939-04-13 と略す。

11) 1939 年 5 月の時点での *L'Action française* 紙の発行部数は、パリで 10,675 部、パリ以外で 26,974 部、定期購読が 7,500 部で全体として 45,000 部程度であったとされている (cf. Sous la direction de Claude BELLANGER et autres, *Histoire générale de la presse française*, tome III, Presses Universitaires de France, 1972, p.511)。但し 1935 年前後からアクション・フランセーズの組織的活動が崩壊しつつあったため、この数字についても正確だとは言い難い (cf. Eugen WEBER, *L'Action française*, traduit de l'anglais par Michel Chrestien, Fayard, 1985, pp.404-418)。

12) 1939 年 2 月の時点で出版されていたブラジャックの作品は出版年順に次の通り (評論には下線を付した) : *Présence de Virgile*, les Editions de *la Revue française*, 1931; *Voleur d'étincelle*, les Editions de *la Revue française*, 1932; *L'Enfant de la nuit*, Plon, 1934; *Histoire du Cinéma*, les Editions Denoël et Steele, 1935; *Portraits*, Plon, 1935; *Le Marchand d'oiseaux*, Plon, 1936; *Animateur de théâtre*, les Editions Corrêa (aujourd'hui Buchet-Chastel), 1936; *Siège de l'Alcazar* (en collaboration avec Henri MASSIS) 1936; *Comme le temps passe...*, Plon, 1937.

13) *La Revue française* 誌への寄稿は 1930 年 11 月 30 日号からである。1931 年 11 月号からは正式に同誌で演劇欄の執筆を始めている。しかし *La Revue française* 誌には、1931 年 11 月号までに 32 編、その後 6 編の計 38 編を寄せているだけである。

14) Robert BRASILLACH, «Alphonse Daudet : "La Doulou", François Mauriac : "Souffrances et bonheur du chrétien"», dans *L'Action française* 16 juillet 1931, repris dans ses *Œuvres complètes*, tome XI, le Club de l'Honnête Homme, 1964, pp.126-129. 以下 AFcl-1931-07-16 と略す。

15) Robert BRASILLACH, «François Mauriac : "le Nœud de vipères"», dans *L'Action française*, 24 mars 1932, repris *ibid.*, pp.238-241. 以下 AFcl-1932-03-24 と略す。

16) Robert BRASILLACH, «François Mauriac : "la Fin de la nuit"», dans *L'Action française*, 7 février 1935, repris *ibid.*, pp.505-508. 以下 AFcl-1935-02-07 と略す。

17) Robert BRASILLACH, «François Mauriac : "Les Anges noirs"», dans *L'Action française*, 30 janvier 1936, repris *ibid.*, pp.637-640. 以下 AFcl-1936-01-30 と略す。

18) Robert BRASILLACH, «François Mauriac : "Vie de Jésus"», dans *L'Action française*, 16 avril 1936, repris *ibid.*, pp.663-666. 以下 AFcl-1936-04-16 と略す。

19) Robert BRASILLACH, «François Mauriac : "les Chemins de la mer"», dans *L'Action française*, 26 janvier 1939, repris dans ses *Œuvres complètes*, tome XII, le Club de l'Honnête Homme, 1964, pp.251-253. 以下 AFcl-1939-01-26 と略す。

20) Cf. «Le livre de M. Mauriac n'est pas plus composé que celui de Daudet et revêt aussi l'aspect de notes, mais ce qui chez Daudet est naturel ne l'est pas chez M. Mauriac et prend déjà un air apprêté.» (AFcl-1931-07-16, p.128.)

21) «L'activité politique de M. François Mauriac, ses fréquentes homélies à l'adresse de ceux qui n'admirent pas suffisamment les déterreurs de carmélites, les à-la-manière-de-Léon Blum qui constituent désormais son travail le plus remarquable (cœur torturé, larmes, angoisse irrépressible, bouleversement de tout l'être, grande voix du président Roosevelt, etc.) risquaient de vous faire oublier qu'il s'agissait aussi d'un romancier.» (AFcl-1939-01-26, p.251)

22) 例えば批判された作家の例としては前述したサルトルの *Le Mur* についての批評の場合を挙げることができる : «[...] : les personnages d'*Intimité*, de *l'Enfance d'un chef*, de *la Chambre*, vivent dans un univers puant et sordide. C'est à croire que l'auteur n'a jamais rencontré d'homme propre, au sens matériel du terme — et nous ne parlons pas des femmes.» (AFcl-1939-04-13, p.281)。評価された作家はモーリス・バレスやシャルル・モーラスなど政治的に右翼思想を標榜する作家が多い。例えば、本論でも取り上げた *Le Nœud de vipères* 論の中でも、小説家モーリアックの資質を評価する際に、突然バレスが引き合いに出されている : «Et puis, M. Mauriac écrit une langue de plus en plus admirable. Une musique sourde, chaude, monte de ses phrases. On sent qu'il s'est formé à l'école des orateurs sacrés, et aussi de Barrès. Mais il y a moins de pompe et d'éclats que dans Barrès. » (AFcl-1932-03-24, p.241)。

23) Cf. «Voulant abandonner la technique du roman court, dans laquelle il avait acquis une incontestable maîtrise, M. François Mauriac, pour le moment, n'a réussi qu'à nous donner une sorte de Dostoïevsky en résumé, qui est au véritable ce qu'un aide-mémoire pour le baccalauréat est à l'histoire.» (AFcl-1936-01-30, p.638)

24) 日付について、*L'Action française* 紙は日刊紙であるので、ブラジヤックの論

が発表された日は1月26日と考えて間違いないだろう。にもかかわらず日付が若干前後しているのは、*N.R.F.*誌の発売日の表記方法に原因があるのではないと思われる。本論中で後述するように、ブラジヤックの最後のモーリアック論はサルトルの論を踏まえて執筆されたと考えることができる。

25) Cf. BOSCHETTI, *op.cit.*, p.64 : «En fait, la théorisation est déjà en soi une différence dans un champ où personne, à l'époque, n'est en mesure d'en opposer un autre. Le renvoi à des "lois précises" contribue notamment à faire résonner avec autorité les verdicts qui abondent dans les essais, à faire paraître fondée l'insolence avec laquelle le débutant critique des auteurs célèbres».

26) Geneviève IDT, «Préface» aux *Œuvres romanesques* de Sartre, dans Jean-Paul SARTRE, *Œuvres romanesques*, coll.«Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1981, pp.xv-xxxiii.

Sartre, critique, et son époque

Sartre, Brasillach, Mauriac

SHIGEMI Shinya

Jean-Paul Sartre et Robert Brasillach traitent, tous deux dans leurs articles de critique littéraire l'œuvre de François Mauriac. Celui-ci était déjà un écrivain important et élu à l'Académie française, lorsqu' en 1933 Sartre a publié dans la *N.R.F.* son article : «M. François Mauriac et sa liberté».

L'emploi ambigu de la troisième personne comme technique romanesque, la fatalité des personnages imposée par le narrateur et le discours inutilement théâtral dans *La Fin de la nuit*, tels sont les trois points sur lesquels Sartre fait des remarques. Concentré sur la problématique du point de vue de la narration et des personnages, son article démasque les défauts techniques du roman. Aussi suscita-t-il des réactions importantes de la part des autres revues littéraires, dès sa publication.

Une des plus grandes réactions vient du côté des droitistes. Robert Brasillach, écrivain d'extrême-droite convaincu, appartenant à la même génération et ayant reçu la même formation pédagogique que Sartre, écrivait alors un grand nombre des critiques surtout dans sa «Causerie littéraire» de *L'Action française*. Dans cette masse d'articles sur les œuvres littéraires contemporaines et classiques, on trouve six articles sur Mauriac rédigés d'une plume plus féroce encore que celle de Sartre.

Cependant, cette férocité satirique n'empêche pas d'entrevoir les remarques qu'il fait sur la technique romanesque chez Mauriac. Brasillach demande au romancier de porter un point de vue cohérent sur ses personnages, pour qu'ils vivent selon leurs consciences dans le roman. On lit ainsi la même critique sur Mauriac chez ces deux écrivains. D'ailleurs, ces réflexions de Brasillach n'ont jamais changé tout au long de sa carrière; même après la publication de l'article de Sartre.

Il est généralement admis que cet article de Sartre sur Mauriac est très particulier. Cependant on comprend maintenant que cette problématique autour de la narration n'était pas le fait de Sartre seul, mais on pourrait en déduire que d'autres écrivains de l'époque partagent la même problématique que celle exprimée chez Sartre et Brasillach.